

オランダの民族衣裳について

Folk-Costumes in Holland

(昭和35年7月20日受理)

加 地 悦 子
(Etsuko Kaji)

Folk-costumes in Vollandam, Marken, Spakenburg, Zeeland, Scheveningen, Katwijk and Friesland in Holland, were described in detail and differences among them were discussed in the connection with the climatic, religious and historical backgrounds.

I 緒 言

現在では、世界の各国とも国際的に共通性のある衣服が用いられ、それを洋服とよんでいる。

これに対して、その土地の住民が、その国の風土や歴史の影響のもとに工夫し、維持して来た独特の衣服がある。これが洋服に対して民族衣裳（フォークコスチューム folk-costume 或はナショナルコスチューム national costume）である。

この、古い伝統に培われた各国特有の民族衣裳は、依然としてその日常生活に残され、或はそうでないまでも独特のものがよく保存されている地方が多い。

民族衣裳は、次の3つのグループにわけて考えることができる。

第1は、文化に取り残された地方の全裸や半裸に近い衣服のグループである。アフリカの奥地、ブラジルやオーストリアの奥地、大太平洋の島々などにみる衣服がそれである。

第2は、文化の程度の高い国で、その地の風土にあつた独特な衣服が、今尚日常着として用いられているものである。日本のきものもこれに属するが、東洋、中近東或はヨーロッパでもオランダ、スイス、フランスなどの田園地方にみられるものがこのグループに入る。

第3に、嘗て昔には日常着として着用していた民族服を、現在では祭礼、儀式などの時にのみ用いるものであり、ヨーロッパの諸国でみられる。

このような民族衣裳を研究することは、その国を理解する一助となるとともに、現代の衣裳についても資する点が多いと考えられ、服飾研究には欠くべからざるものである。私は昭和32年9月から1年間余りの欧米滞在を機会に、欧米各国の民族衣裳についての資料を収集し、種々の点から考察をこころみだが、ここには、オランダの民族衣裳について報告したい。

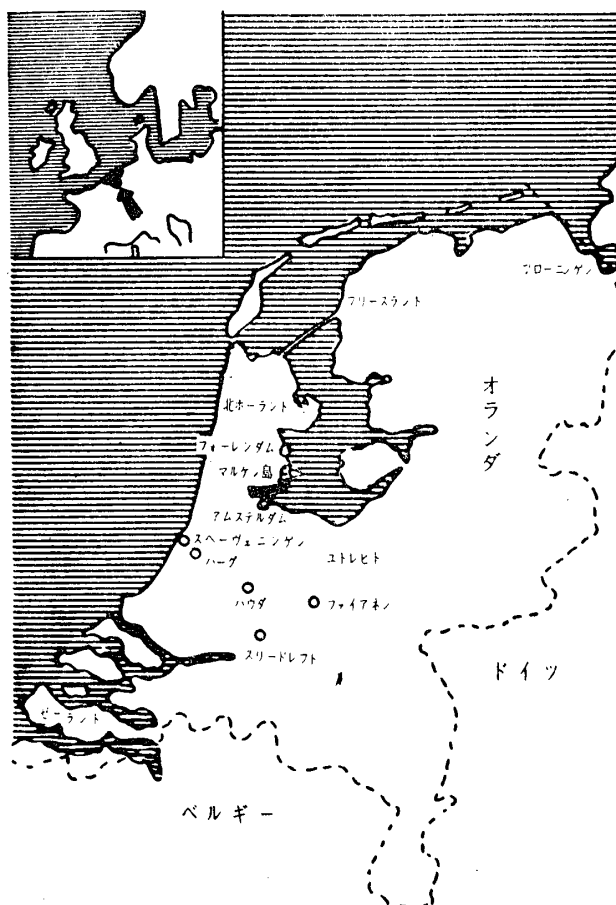
II 調査方法

昭和33年10月オランダに滞在、アムステルダム及びその近郊殊にゾイデル海の小島マーケン (Marken) 及びヴォーレンダム (Vollendam) の2地区については現在に於て調査、その他の地方については各地の婦人から実地の資料を得て説明を聞き、また現地の博物館も利用した。

III 調査成績

調査地区は第1図に示す。

第 1 図



第2図 マルケン島の少女達と著者



1. マルケン島

マルケン島はアムステルダム近く、ゾイデル海にかぶ一小島で、宗教はプロテスタントである。この地の民族衣裳は17世紀頃からのもので、女子の服装(第2, 3図)は幼児から老婆に至るまで、赤系統の派手な模様のブラウスと、黒或は濃紺のスカートから成る。

ブラウスは赤、白の太い縦縞模様のもので、胴衣には光沢のある更紗模様の日本の帯地に似たものを着ている。これはシンツ(Chintz)といて、花鳥の模様が刺繍されているが、昔オランダに木綿のなかった時代には、今のインドネシアから輸入されていたとのことである。

この他、胴衣は祭日や教会に行く時、結婚式などに際しては、厚手の手づくりの総模様の刺繍を施した美しいものを着る習慣がある。このタイトな胴衣の刺繍は多彩で実に美しいものである。普段は着用しない。

頭は老婆に至るまで前髪をたらし、後髪を長く娘の様にしている。帽子はトップの平らな丸型のベビー帽の様なものが特徴的で、顎の下で紐じめにされる。ここにはバロック時代の様式がはつきり認められる。

男子の服装(第4図)は、殆ど黒一色の素朴なものである。帯だけに赤を使い、帯の中心に2つの金釦がある。他の地区と異なるのは、ズボンの腰から膝まではゆつたりとふくらみがあり、膝下からはぴつたりと脚についたスタイルである点である。

現在マルケン島では日常の生活にこの民族衣裳を用い

第3図 マルケン島の母と子



ているが、今ではこの島は全島が一つの開放されたオープンミュージアムでオランダの重要な観光資源となっており、こういった服装も、今では観光客のためにという傾向が強い。

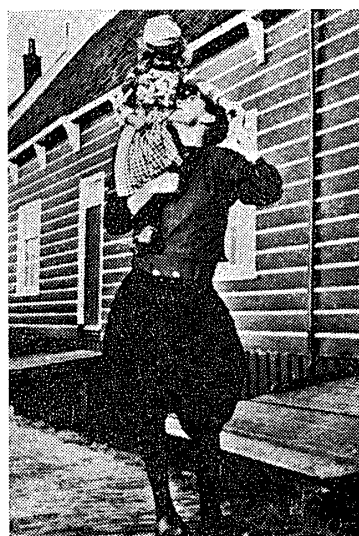
2. フォーレンダ

マルケン島から近い距離にあるフォーレンダムは漁村であるが、マルケン島とは全く異つた特有の服装がみられる。周囲の村はプロテスタントであるが、この村は完全なローマンカソリックを守っている。

女子の服装(第5, 6図)は、平常は地味な縦縞か黒のブラウスに、黒或は縞の長いブリーテッドスカート、それに上部に切替えのあるものや派手な縦縞のある前掛をつけるといった姿である。日曜、祭日には特に飾り立てて、はなやかである。胸あてに花模様の美しいジレーを用い、黒のブラウスの角衿の大きな衿ぐりの下に出す。

冬には、この服装の上からウールの温い大きなショールを掛け、スカートも幾枚も重ね、下着で調節する。装身具には金銀の耳飾り、かんざし、指輪、ネックレスをつけるが、ネックレスは金の細工に玉はさんでつく

第4図 マルケン島の父と子



第5図 フォーレンダムの婦人



第6図 フォーレンダムの婦人



つた美しいものである。

帽子は白いレースのとんがり帽子が特徴であるが、冬は黒を用い、夏には白いレースの帽子をかぶる。また普通は黒を用いていても日曜になるとやはり白い帽子をかぶる。色の鮮やかな前掛は正装の時にも用いる。

男子の服装(第7、8図)は黒色を主体とするが、マルケン島のそれとは全く異なり、下までゆつたりとした日本のモンペ式のズボンである。ベルトの前に2個の大きな銀ボタンがあり、その部分はずしてぬぎ着する。

黒の上着の前明を大きくV字形に開いて、下から派手な縞模様の胸あてをのぞかせ、首には赤いネックラインである。一般に男子も2〜3才までは女子と同様スカートををはく。

オランダの象徴的な民族衣装として広く紹介されているのは、このフォーレンダムの男女の服装なのである。

3. ゼーラント地方

この地方の特色は白レースの帽子にある(第9図)。この図に示されたものは、ヴァルヘルン島におけるものであつて、白レースの、後の末端が翼の様に大きく拡がっている型の帽子を、螺旋形の金色のピンで額の両側でとめてある。この少女達はカトリック系である。同島のミドルヴァルでは、宗教はプロテスタントであり、大きな横楕円形のレース帽を用い、宗教による相違がみられる。これらの帽子に、このゼーラント地方にスペイン占領時代の続いた名残が認められる。

またこの地方一帯は、胸あきの広いチョッキも特徴的である。

第7図 フォーレンダムの男



第8図 フォーレンダムの家族



第9図 ゼーラントの少女



4. スパーケンブルグ

この地方では、女子は後から続いた胸あてを首から乳下位までの高さにかぶり、両脇を紐で結んでいるのが特徴である。

5. フリースランド、スヘーヴェニンゲン及びカッウェイク

この地方は漁村地区で、風が強いため、特有の毛糸編みの帽子、マフラー、肩掛などが一般に用いられている。

第10図 Klomp

オランダ特有の木靴

この他、オランダ全国にいまだに用いられている木靴(クロンプ)は、世界に有名である(第10図)。

この木靴は、海面より低い湿地帯の多いオランダでは農耕靴或は漁村地区の作業靴として広く用いられるが、

アムステルダムなどの都会地でも見うけられる。材料は elshout という木の太い幹をのみでくり抜いてつくる。日常使用されるものはざらざらした木ざわりで、割に重くて、はき心地はよくない。土産品用の木靴には奇麗な彩色を施してある。



IV 考按並に結論

オランダは Netherland という言葉が示すように、その国土の4/5は海面より低く、辛うじて堤防によつて陸地となつているにすぎない状態である。いきおい産業も漁

業や農業、牧畜が主となり、湿地帯における作業靴としてクロンプという木靴がうまれた。また狭い国土のため海外貿易に重点がおかれ、17世紀初頭、遠く東洋にまで進出した嘗てのオランダの黄金時代は、当時の日蘭交易からもしのばれるが、民族衣裳にのこる胴衣のシャツなどは、木綿のなかつたオランダに、嘗ての植民地インドネシアから運ばれたものである。

また、オランダは地理的には、ヨーロッパの回廊ともいべき位置にあるために、民族の単一性が保たれていない。古くゲルマン民族はここに居を構え、BC 50年頃にはローマ民族の侵略を受け、現在のオランダ人はゲルマン及びラテン民族の血統をひいている。その後も、ヨーロッパ各地の避難民が、数世紀にわたって吸収されたり、オランダ植民地における現地人との混血など、長い歴史の間には複雑な混血を重ねて来ているわけである。従つて、同じ国内でも地方によつて風俗、宗教、言語、習慣、生活様式に著しい相異がみられている。これを大別すると、ベルギーに近い南部と、アムステルダムを中心とする北部とにわけられる。そのまた同じ地方でも地域によりいろいろの点で相違している。

このようなオランダであるが、共通した、最も普遍的な服装としては勿論洋服である。しかし一部の地方には今も尚伝統的な民族衣裳が日常着として、また祭礼や儀式の時に特にはなやかに愛用されている。このような地域は、フオーレンダム、マルケン、スパーケンブルク、ゼーランド、スヘーヴエニンゲン、カツウエイク及びフリースランドの各地方である。

そのおのおの地方において、独特な民族衣裳をもっている根源には、すでにのべたいろいろの理由があるわけであるが、特に目立つものは、海岸地方と農耕地帯にみられる気候の相違、それにプロテスタントとカソリックという宗教上の相違であると考えられる。

ともあれ、同じオランダ国内にあつても宗教、気候、風土などによつて、各地方にそれぞれ異つた特色のある民族衣裳が現存しているわけである。

以上、オランダの各地方における民族衣裳について調査した結果を報告した。

(尚本論文内容の一部は昭和34年10月日本家政学会第11回総会において発表した。)